

赤羽末吉 雪国の民話絵本―『かさじぞう』と『つる
ようぼう』

執筆者 上島史子

掲載書籍 『赤羽末吉 絵本への一本道』平凡社 二
〇二〇年

赤羽末吉には、雪国の民話を描いた二冊の絵本があ
る。一九六一年のデビュー作『かさじぞう』と、その
十八年後の『つるようぼう』だ。

十五年いた旧満州（中国東北部）から赤羽が日本に
引き揚げたのは、一九四七年、敗戦から二年後のこと
だった。戦後の過酷な時期を経て、ようやく生活が落
ちついてきた一九五四年二月、赤羽は仕事の休みをと
って秋田の男鹿半島を旅した。十年前に新京（現・長
春）で写真集『雪國の民俗』*₁を手にして以来、その
風俗に魅了されてきた地だ。長く離れていたからこそ
わかる、日本の美しさを描きたい―赤羽にとって、
その象徴が雪国だった。

以後、六年に渡る雪国通いが始まった。スケッチブ
ックとカメラを携え、絵になる風景や風俗を求めて秋

田、新潟、福島を歩きまわった。雪国の子どももの服装
や遊び、市に集う人々のようす、民家や街並み、小正
月の伝統行事のなまはげやかまくら、さいの神。赤羽
のスケッチや写真は、当時の民俗資料としても魅力的
だ。家が雪にすっぽり埋まってしまった風景もあり、
慣れない雪歩きはさぞ大変だったろうと想像する。飯
山線で豪雪地帯を旅した一九五六年のスケッチブック
には、「雪の恐しさを身をもって肌で経験しなければ絵
にでない」と記されている。

『かさじぞう』は、そんな赤羽の雪国への思慕と体
験が結実した絵本だ。当初は雪国を大作に描こうと考
えていたようだが、茂田井武の絵による絵本『ゼロひ
きのゴーシュ』（「こどものとも」二号 一九五六年）
に感動して、福音館書店の松居直のもとに持ち込みを
したのをきっかけに、絵本への道が開かれた。「雪国が
描きたい」という赤羽に、松居は瀬田貞二の再話によ
る民話「かさじぞう」を渡した。一九五九年の雪国行
きは、地蔵や編笠の人のスケッチもあり、「かさじぞう」
のための取材だったことがわかる。「自分のこれからの
スケッチは、すべて民話につながりを持たせねば意味
ないと思う」というメモもある。

赤羽にとって雪国はまさに墨絵の世界であり、『かさじぞう』を墨絵で描くのもごく自然な成り行きだった。旅のスケッチや記憶をもとに、自分の見た景色をそのまま墨絵にした習作も多く残っている。この絵本の原画は、表紙や扉の装丁部分を除いて残念ながら現存しないが、よくにじむ画仙紙に、彩色用の柔らかい筆でひいた墨線は、絵本で見てもなんとも素朴で味わい深い。「私はナレだけでかく絵は好きではない。絵というものは、一本一本の線はただどしくても、心をこめてかくものだ」*₂と赤羽はいう。身をもって雪国を体験したからこそ、一本の線が、雪の湿り気や重み、人の心の深さといった含みをもつ。一九六一年当時、墨絵の絵本に対して子どもにはわからないだろうといった批判もあつたというが、杞憂だったことは六十年経た今となっては明らかだ。

以後赤羽は、数々の物語を絵本にした。物語を深く読み込んで、舞台となる風土や風俗を研究し、それにふさわしい絵を模索するなかで、絵画表現の幅は大きく広がった。そして時を経て、再び本格的に雪国の民話に挑んだのが一九七九年に出版した『つるにようぼう』だ。『かさじぞう』のときにはまだ絵本とはなにか

見当がつかなかったというが、この絵本を描くころには、絵本づくりに対する明確な考え方をもち、絵本界でのオピニオンリーダー的役割も果たしていた。この絵本づくりについても赤羽自身がエッセイ*₃で詳しく披露し、制作過程のわかる写真も残している。民話の研究や時代考証のための資料、雪国取材した写真やスケッチ、人物の造形のための下絵、場面構成を考えるための台割やダミー、下絵から本描きに挑む過程までが記録されていて、その構築的で周到な絵本づくりがよく分かる。

一九七八年一月、赤羽はこの絵本を描くため、雪の奥羽山脈取材しに岩手郊外を訪れた後、大曲から福島まで奥羽本線の各駅停車に乗って、ゆっくり雪景色を眺めたという。このときの写真やスケッチとともに、十年前に黒姫山を描いたときのスケッチも参考にした。絵本のなかの雪は、それまで赤羽が身をもって体験してきた雪そのものだ。にじみにくい肉厚の奉書紙に、やわらかい彩色用の筆の墨線で描いた雪肌は丸く、しつとりと重い。

この絵本で赤羽が描きたかったのは、日本の雪国の風土であり、人の心の織り成すドラマだ。赤羽は

物語を視覚化するために、いつも納得いくまで風俗を調査する。ここでは時代を中世と設定し、文献や当時の絵画を研究したほか、中世歴史学の専門家の話も聞いたそうだ。そうした詳細な調査をしておきながら、絵本に描くときには惜しげもなく細部を省き、余白を大きくとる。人物描写もあえて表情を見せないシルエットや逆光を多用している。細部の描写より、読者のイメージをいかに引き出すかがより大切だったのだろう。雪国の寒さとその奥にあるあたたかさ、生活の厳しさと美しさ、人の心のやさしさと悲しさ。そうした言いようのないものが、この絵本には満ちている。

初心がみずみずしく表れた『かさじぞう』と、長年積み上げてきた絵本づくりの極意が発揮された『つるによろぼう』。二冊の雪国の絵本からは、日本の風土の美しさを絵本に描いて子どもたちに見せたいと、たゆまず精進し続けた画家の道が見えてくる。

『私の絵本ろん』に収録)

* 3 エッセイ「つるによろぼう」一九七九年 (偕成社
『私の絵本ろん』に収録)

* 1 柳田國男、三木茂共著『雪國の民俗』 養徳社 (旧
甲鳥書林) 一九四四年

* 2 エッセイ「八方やぶれの展開」一九八一年 (偕成社